



令和2年度 連隊炊事コンテスト



華麗なる勝負

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐 1 佐）は、5月11日に秋田駐屯地において令和2年度連隊炊事コンテストを実施した。

本コンテストは、各中隊炊事技能の練度を向上させる目的で行われ、課題メニューをカレーライスとして各中隊の代表者5～6名が中隊の威信をかけて競い合った。

コンテストは、野外炊事具を使用し、作業中の衛生管理、料理の味・盛り付けの美しさ等を競うものであり、炊事長の命令下達により状況が開始されると、調理員は各中隊独自のレシピにより手際よく調理に取り組み、鍛えられた腕前を発揮して示された時間内にカレーライスを完成させることが出来た。

その後、連隊長及び各幕僚等が審査員となり、厳正な試食審査が行われた。各々の旨味が際立ち、それぞれ優劣つけがたい接戦であったが、これまで練成してきた成果を出し切った第2中隊が、連隊長以下審査員の胃袋を掴み優勝した。

6月3日の連隊朝礼において表彰式が行われ、その際、連隊長は「同じ材料を使用しても、切り方や調味料で各中隊すべて味が違った。これからも切磋琢磨してほしい」と笑顔で締めくくった。

調理風景1



調理風景2





令和2年度 連隊炊事コンテスト



審査の様子



完成した料理は同じ
条件で審査へ



連隊朝礼で表彰を受ける
優勝 第2中隊





基礎となる部隊の訓練検閲



新緑に伏す

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐 1 佐）は、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言解除に伴い、万全の対策を講じた上で、6月5日～10日までの間、岩手山演習場において、第3中隊及び施設作業小隊の「基礎となる部隊の訓練検閲（以下：検閲）」を実施した。

本検閲は、陣地占領している敵部隊に対し、侵入・偵察から攻撃に至るまでの一連の行動を評価するもので、状況間は、バトラー（レーザ交戦装置）を積極的に活用し、より実践的な環境下において各個・部隊戦闘能力等を正確確実に評価した。そして連隊2次野営として他中隊も参加しており、バトラー訓練を兼ねて第3中隊協同部隊として行動した。

また、今回はHTC（北海道訓練センター）の初運営に参加する39連隊の事前訓練対抗部隊としての任務も有している。昨年FTC（富士訓練センター）において史上初めて評価支援隊を破り勢いに乗る39連隊と交戦できる機会に各々が熱く燃えていた。

7日未明、演習場内へと進出した受閲部隊は、速やかに集結地を占領し、攻撃戦闘への準備を始めた。新緑に覆われた岩手山と同化した隊員たちは、身の丈もある植生をかき分けて敵陣地を奪取せんと隠密かつ大胆に邁進し、あるいは敵の砲迫攻撃や襲伏撃等の脅威の中で敵の障害（地雷等）を処理し、任務を達成した。

バトラーを使用した実践的な環境において、彼我の自由意思がぶつかり合う中、様々な戦況を生みだし、多くの戦訓を得られた本検閲は、部隊を更なる躍進へと導くであろう。



基礎となる部隊の訓練検閲



第3中隊
攻撃前進



第3中隊
集結地を警戒する歩哨



第3中隊
敵陣地への攻撃



第3中隊
敵陣地への攻撃



施設作業小隊
命令を徹底



施設作業小隊
地雷処理





米沢寿し店50周年について



陸自駐屯地で唯一の「寿司屋」永年勤続50年（1）

令和2年7月某日。一枚の紙が張り出されていた。

「祝50周年。引続き変わらぬご愛顧を賜りますよう…」

それは秋田駐屯地に所在する、陸上自衛隊で唯一の寿司屋『米沢寿し店』に張り出されたものだ。今年で68周年を迎える秋田駐屯地を50年の長きにわたり見続けた米沢寿し店。隊員たちから「母さん」と呼ばれ、親しまれる米沢嗣子さんの思い出とともにその歴史を紹介したい。

かつて日本中が熱狂した万国博覧会、三波春夫の歌ともに国民が盛り上がった昭和45（1970）年4月、駐屯地の片隅で一組のご夫婦によって米沢寿し店は始まった。横浜の名店で腕を磨いた元コックの米沢三男さんと奥さんの嗣子さん、二十代半ばの若夫婦が営む寿司店は、その後多くの人たちに支えられながら、その齢を重ねて行くこととなる。そんなお店にも一度大きな転換期があったという。それは平成16（2004）年、夫の三男さんが他界された時だそう。嗣子さんは店の去就について迷ったそうだが、存続を望む多くの隊員の声で店は残った。「私は寿司を握る夫を横で見ていただけ。見様見真似でしかないけど」そう言って握ってくれる嗣子さんの寿司は一般的な寿司より些か大きい。訓練でお腹をすかせた隊員が満足できるようにとの思いが込められているのだ。



米沢寿し店50周年について



陸自駐屯地で唯一の「寿司屋」永年勤続50年（2）

そんな嗣子さんが見続けた秋田駐屯地の物語は枚挙にいとまがない。多くの訓練もさることながら、日本海中部地震、阪神淡路大震災、東日本大震災等々、隊員たちが八面六臂の活躍を見せた裏側で、ひたすら見送りそして出迎え続けた。その中でも特に東日本大震災の思い出は深いと語る。東北が被災し、駐屯地の主力部隊が一斉に被災地に駆けつけた後、日本中の部隊が増援として数多くやってきた。京都の隊員に秋田弁を教えたこと、北海道の隊員が涙を浮かべ帰隊したこと、店の前に置かれた一冊のノートにはそんな隊員たちの感謝の言葉があふれていたそうだ。

そして「階級なんてよく解らなかったから」という嗣子さんにとって、自衛官はすべからく「隊員さん」や「隊長さん」であり差などはないという。故にかつて秋田駐屯地司令を務めた現陸上幕僚長である湯浅悟郎陸将も嗣子さんにとっては「隊長さんの一人なのよ」と笑顔で語る。

現職の自衛官であれば勤続10年と25年、それぞれの時に防衛記念章の着用を許される。米沢寿し店の50年という長さはその倍に比する。これほど自衛隊と共に在り、寄り添い続けた人が全国に如何ほどいようか。取材した時伺った話は今述べたものの何倍にも渡り決して書ききれものではない。もしも秋田駐屯地に訪れることがあったら是非とも米沢寿し店の暖簾をくぐってほしい。変わらぬ笑顔の「母さん」が旨い寿司と楽しい話で出迎えてくれるだろうから。



米沢寿し店50周年について



昭和45年～53年
開店当初の様子



昭和53年～平成11年
移築した新売店施設にて



平成11年～
再度移築した現在の売店施設にて
コロナ対策でカウンターを覆っている



コロナウイルス流行以前の
客席の様子



現在の喫食の様子



隊員たちからの数々の贈り物を手に写る米沢さん





防衛大学校3学年普通科部隊実習



防衛大学校3学年普通科部隊実習(1)

第21普通科連隊(連隊長 五十嵐1佐)は、7月2日、秋田駐屯地において部隊実習に訪れた防衛大学校3学年の学生を盛大に出迎えた。

連隊は例年この時期になると防衛大学校3学年の学生を受け入れており、本年は7月2日から22日までの間実施され、隊員たちと様々な訓練や行事を共にし、貴重な体験を通じ部隊の実情を把握させた。

2日、初めて秋田駐屯地の営門をくぐった学生たちは僅かに緊張した面持ちで申告へと臨んだ。「防衛大唯一である、部隊実習を教訓収集の場とし、知識及び技能の修得に励む」など、それぞれ部隊実習へかける思いを大きな声で宣言し、その初々しい元気な姿を見た多くの隊員たちは自分の入隊時の心情を思い出したかのように見守っていた。

連隊長は「よりよく皆とふれあい、共に日々努力して、訓練を頑張ろう」と述べ学生たちを歓迎するとともに部隊実習へ向けて激励した。

部隊実習前半は主に駐屯地において各種訓練や勤務を体験し、後半は王城寺原演習場における市街地戦闘訓練練成野営や岩手山演習場における連隊第3次野営(射撃)に参加した。

歓迎と激励を述べる
五十嵐1佐



実習への抱負を述べる
学生たち





防衛大学校3学年普通科部隊実習



防衛大学校3学年普通科部隊実習(2)

王城寺原演習場では情報システム訓練(モニター)による射撃訓練、市街地戦闘訓練、野戦築城(個人携帯対戦車弾用掩体構築)を実施した。特に掩体構築ではどんよりとした小雨の中、掘りづらい土質の地域で、エンピに粘土の様に張り付いてはがれない土を相手に、足元を泥まみれにしながら、最後まで諦めずに掘りすすめた。

最後の訓練となった岩手山演習場においては行進訓練を始めた瞬間大雨に見舞われ、身も心も疲弊していく中、決して心折れることなく完歩し、全員で敵と戦闘し突撃に至った。

その後、全ての課目を終了し、師団各部隊で研修していた同期と合流した学生たちは、晴れやかな笑顔をしていた。最後に部隊実習を振り返り感想を聞くと「銃口管理等、今まで知識として知らなかったものが、どうして必要なのか実際の訓練を体験することによって学ぶことが出来たのが印象的です」など、多くの学生が防衛大学校において学ぶ知識を、陸上自衛隊の現場を通して体験できたと語った。中には「(秋田の風土が)とても過ごしやすかったです」と、迎え入れた郷土出身者にとっては訓練成果と並ぶほど嬉しい感想を述べてくれた学生もいた。

学生たちは3週間の部隊実習を終え、僅かな疲労感と大きな達成感を胸に、21連隊を後にした。



防衛大学校3学年普通科部隊実習



市街地戦闘訓練



掩体構築訓練



夜間行進訓練



敵陣地への突撃



逆襲対処にて敵車両を撃破



手を振りながら満面の笑顔で帰路につく





師団レンジャー養成集合教育帰還式



r（レンジャー）の系譜

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐 1 佐）は、7月13日、秋田駐屯地において、師団レンジャー養成集合教育帰還式を実施した。

本教育は、9師団管内の部隊から選抜された隊員たちが、レンジャー隊員となるために臨む過酷な教育である。本年度は青森駐屯地で実施され、21連隊からは5名の隊員が約3カ月におよぶ全過程を乗り越え、晴れて新たなレンジャー隊員となって、秋田に帰ってきた。

帰還式当日は梅雨とは思えないほどの晴天に恵まれ、厳しい教育を成し遂げた男たちの晴れ晴れとした姿が遠目にも感じることができた。

清々と駆けてくる新レンジャー隊員たちは、多くの隊員と、帰還を待ちわびた家族たちに出迎えられた。五十嵐 1 佐は訓示において5人の労をねぎらうとともにこれからの抱負を訪ねた。新レンジャー隊員たちは、家族との時間や今後の訓練への取り組み方など、それぞれの思いを語っていた。

帰還式が終了すると、各中隊それぞれの出迎えが行われ、再会を祝っていたが、そんな中、自衛隊特有の奇跡の瞬間があった。

それは帰還した第4中隊の藤原 3 曹がご家族と歓談している時であった。奥様がお子さんに向かって一言「おじいちゃんだよ」と呼びかけると、見つめる先には迷彩服の男性が立っていた。それは同時期に秋田駐屯地において実施していた予備自衛官招集訓練に参加中の藤原予備 3 等陸尉の姿であった。退職した隊員が偶然にも予備自招集の日に息子のレンジャー帰還に遭遇したのである。3年前に退職された藤原予備 3 尉は、かつて秋田駐屯地を代表するレンジャー隊員の一人であり、警備幹部等を歴任された駐屯地の誰もが知る隊員であった。

予備自衛官の父と現職の息子、少しお互いに照れた様子の二人はそれでも嬉しさを隠し切れない様子であった。そして親子二代続いた r の継承はご家族のみならずその場に居合わせた隊員たちの心も打つ瞬間であった。

r は誰でも簡単に到達できる頂ではない。到達した隊員には自負を、他のものには信頼と憧憬をあたえる。今年その頂に到達した5人のレンジャー隊員が新たな石垣となって r の山を支えていく。



師団レンジャー養成集合教育 帰還式



帰還する隊員たちと
盛大に出迎える仲間たち



5人を労う五十嵐1佐



これからの抱負を述べる
本部管理中隊 佐藤3曹



わが子を抱き上げる
重迫撃砲中隊 佐藤3曹



情報小隊による記念撮影



親子2代でのレンジャーも記念して
第4中隊 藤原3曹(息子)と藤原予備3尉(父)



市街地戦闘訓練練成野営



第21普通科連隊（連隊長 五十嵐 1 佐）は、7月13日から17日の間、王城寺原演習場において市街地戦闘訓練練成野営を実施した。

本訓練は、努めて多くの隊員を参加させ各中隊の市街地における戦闘能力の向上を図るとともに、360度かつ立体的敵の脅威下で、小区毎に状況が激変し、至近距離で激しい戦闘が生起するという市街地戦特有の環境下において、隊員の状況判断能力、実員指揮能力の向上及び戦闘センスの涵養を図ることを目的に実施した。

各中隊は、練成野営に参加する前日まで、部隊のグラウンドでテーブルーム（テープ表示を使用した簡易的な訓練施設）を使用した訓練や駐屯地施設を利用した訓練などで練度をあげて、本訓練に臨んだ。

野営が始まると、市街地訓練場において空砲及び電動エアガンを使用して、演習項目に掲げている、警戒確認要領、組連携要領、室内掃討要領をさらに練成し、最後には総合訓練として、対抗部隊を配置し、高い緊張の下、彼我の意思と相互の射撃が入り乱れる中、訓練が実施された。

全ての課目を終了した各中隊は警戒確認要領、組連携要領及び室内掃討要領を各隊員に理解させると共に、各人の状況判断能力及び実員指揮能力の向上を得て本野営を終了した。



市街地戦闘訓練練成野営



階段の前進



外部からの前進



ホールの警戒



部屋の掃討



人員検索



組員への手信号



令和2年度連隊射撃野営



初夏の弾雨

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐 1 佐）は、7月19日から24日までの間、岩手山演習場において令和2年度連隊射撃野営を実施した。

初日こそ荒天に見舞われた本野営であったが、その後は終始澄み渡る青空の下、各中隊は与えられた射撃基盤を最大限活用して実弾射撃訓練を行った。

戦闘射場を活用した小火器射撃、重機関銃による射撃練成、昼間及び夜間における砲迫の射撃、携帯対戦車弾の縮射射撃、施設作業小隊による爆破の普及訓練と自隊の応用訓練等が行われた。

特に戦闘射場での小火器射撃は各中隊が様々な企図の下で多様な訓練に励んだ。隊員個人を対象とした射撃検定や応用射撃では、フィールドを縦横無尽に移動しながら地域を分析し、最適なルート・射撃位置を選定しながら前進した。分隊・小隊による部隊戦闘射撃では、敵情の分析はもちろん、前後左右との連携を確実に実施しながら迅速に前進し、あるいは突撃に向けじりじりと近迫していった。各中隊がそれぞれ練成する様は同じはずの戦闘射場が、まったく異なる戦場のように見えた。

6日間に及んだ射撃野営は、それぞれが与えられた練成基盤を十二分に活用し、確かな成果を得て終了した。



令和2年度連隊射撃野営



自ら地形地物を判断
して射撃位置を選定



立姿による応用射撃



分隊長の統制で一斉に射撃



前進時は一瞬で最高速へ



重機関銃射撃



携帯対戦車弾縮射射撃



重迫撃砲中隊及び普通科中隊の 迫撃砲小隊による夜間射撃



宵闇に待つ

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐 1 佐）は、7月19日から24日までの間、岩手山演習場での令和2年度連隊射撃野営において、重迫撃砲中隊及び普通科中隊の迫撃砲小隊による夜間射撃を実施した。

夜間射撃は20日夜に重迫撃砲中隊による120mm迫撃砲射撃、22日夜に3・4中隊の各迫撃砲小隊による81mm迫撃砲射撃を行った。

各中隊は昼間に実射訓練を兼ねて夜間射撃の為、諸元を選定し、日暮れに備えた。砲の口径こそ違えど、迫撃砲における本質は変わることではなく、すべての迫撃砲部隊は、まるで写し鏡のように正確に準備していた。

19時を過ぎ、太陽は完全に姿を隠し、目の前の人物の顔すら目視出来ない暗夜の中、射撃開始の合図が木霊した。立て続けに放たれる照明弾は弾着地域を煌々と照らし、瞬時に判断した観測者から着弾の結果が報告される。そして射撃指揮班が、高速論理思考で瞬く間に修正諸元を選定すると、各分隊に射撃命令が下される。、分隊は矢継ぎ早に訪れる射撃命令に戸惑うことなく粛々と弾を出し続ける。各迫撃砲部隊は、ひとたび射撃が開始されると、まるで一つの生き物のように流れるような連係動作を魅せた。

夜の闇に大輪の花を咲かせた夜間射撃は、夜間における行動はもちろん、暗闇に研ぎ澄まされた神経は、各人の能力をより洗練させ、各迫撃砲部隊をより高い次元へと導き、幕を閉じた。



重迫撃砲中隊及び普通科中隊の 迫撃砲小隊による夜間射撃



昼間にすべての射撃準備を整える



わずかな光で活動する射撃指揮班



爆炎は一体を照らす



重迫撃砲中隊による夜間射撃



第4中隊による夜間射撃



第3中隊による夜間射撃



施設作業小隊、各種爆破訓練



深森の爆轟

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐 1 佐）が、7月19日から24日までの間、岩手山演習場において実施した令和2年度連隊射撃野営において、本部管理中隊 施設作業小隊（小隊長 裊地 2 尉）（以下：Pi小隊）は、各種爆破訓練の教育及び検証を実施した。

野営前半は各中隊への教育普及に尽力し、手りゅう弾投擲、指向性散弾、小型指向性散弾の実爆訓練を実施。各種射場勤務員として安全確実な訓練をサポートし、各中隊の実爆能力の向上に寄与した。

後半は廃材等を活用し、多種多様な状況を想定して検証訓練を実施した。通常障害物と密接させて使用する破壊筒を、意図的に距離間隔を空けて使用し、その効果範囲を検証し、また爆発物による樹木の切断に際しは、二種類の爆薬による破壊効果の検証などを行った。『知力と体力』持てる能力をフルに活用し練成は実施された。

特に樹木切断爆破では、一般的な爆薬と、通常爆破の補助として使用される導爆線を代用として2種類を検証した。Pi小隊においても代用爆破は珍しいらしく、小隊長も「（今回の設置要領で）実際の効果として切断まで至るか未知数」と述べていた。しかし検証してみると、一般的な爆薬は古木を木端微塵にし、代用爆破は想定した爆破指向性が十分に発揮され、真っ二つに分断された古木は約6mも吹き飛ばすほどであった。

訓練後小隊長は「（教範や先人の教えで）知識として知り得ていた応用的運用を実際に体験できたことはこの上ない経験となった」と語り、Pi小隊は更なる練度向上を果たした。



施設作業小隊、各種爆破訓練



施設小隊の指導の下実施された
小型指向性散弾の実爆訓練



破壊筒による爆破範囲検証



試行錯誤して導爆線
の効果を予測する



二つ並べられた樹木切断爆破



瞬間に爆炎が包み込む



見事に切断され約6mも
吹き飛ぶ古木の片割れ



秋田県内の高校生に対する インターンシップ支援



夢の自衛隊生活

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐 1 佐）は、8月5日から7日の間、自衛隊秋田地方協力本部の依頼を受け、秋田県内の高校生に対するインターンシップを支援した。

今年は県内高校19校76名（男子67名、女子9名）が参加し、訪れた高校生たちは、緊張した面持ちで駐屯地の門をくぐった。

三日間に渡り実施されたインターンシップでは、数多くの訓練体験や生活体験が行われ、ヘリコプターの体験搭乗に始まり、各種入隊制度の説明、天幕（テント）展張体験、救急法体験、ロープ結索体験、装備品展示、格闘体験、各職種の職場見学等が行われた。

特に格闘体験は、一番の盛り上がりを見せた。格闘指導官たちが、自衛隊で実際に訓練している格闘動作の中から、日常における危機回避と護身のための動作を抜粋して指導し、時にコミカルな寸劇仕立てで展示すると高校生たちは大笑いしつつもその技術の奥深さに感心していた。

その他、隊員と同じ食堂で食事したり、売店で迷彩グッズを買い求めたり、遠方在住の高校生は宿泊したりと、それぞれが目一杯秋田駐屯地の時間を満喫した。

全ての課目が終了し、今回の感想を尋ねると「（自衛隊について）色々調べてきたけれど、それ以上の事を学び体験することが出来た」「（天幕では）思ったより天井が高く過ごしやすそうだった」など、初めて触れた自衛隊の生活を興奮した面持ちで語ってくれた。

来年の春、今回参加した高校生たちが、我々と同じ制服に身を包み、頼もしい後輩となる姿を夢見てインターンシップは終了した。



秋田県内の高校生に対する インターンシップ支援



ヘリコプター体験搭乗



天幕展張体験



隊員とともに昼食



救急法体験



格闘体験



休憩時間に売店で買い物



秋田県自衛隊殉職隊員追悼式



英魂に哀悼と感謝の心を捧ぐ秋田県自衛隊殉職隊員追悼式

秋田駐屯地（駐屯地司令 五十嵐 1 佐）は、9 月 1 2 日、駐屯地慰霊碑前において「令和 2 年度秋田県自衛隊殉職隊員追悼式」を執り行った。晴天に恵まれることが多い秋田駐屯地の追悼式は、本年も澄み渡る秋空に恵まれ、十九柱の御霊と参列した者たちの心を安んじる天候となった。式には、ご遺族をはじめ、自衛隊協力団体等からの来賓のほか、秋田県所在部隊長、駐屯地各部隊長が参列した。

五十嵐駐屯地司令は、「殉職された皆様の尊い志を受け継ぎ、貴重な教訓を活かし、国家防衛という崇高な使命を果たすべく、精強な自衛隊の育成と、任務完遂に邁進しますことを、ここに、改めてお誓い申し上げます。」と追悼の辞を述べた。引き読み、来賓を代表し、秋田県防衛協会中泉松之助会長から追悼の言葉を頂いた後、献花、儀仗隊（第 3 中隊佐々木 3 尉以下 1 3 名）による拝礼・弔銃をもって、十九柱の御霊をお慰めし、追悼式は厳肅かつしめやかに終了した。



秋田県自衛隊殉職隊員追悼式



五十嵐司令を初め、
黙祷を捧げる自衛官



追悼の辞を述べる
五十嵐司令



追悼の言葉を読み上げる
秋田県防衛協会 中泉会長



ご遺族による顕花



秋田県隊友会高橋会長による献花



儀仗隊による拝礼



令和3年駐屯地成人式



新たな門出

秋田駐屯地（駐屯地司令 五十嵐 1 佐）は、1 月12日、駐屯地体育館において令和3年駐屯地成人式を挙行した。

今年の冬は、全国各地で多くの成人式がコロナ禍によって延期・中止された。しかし、駐屯地で挙行される成人式は各自治体のそれと違い、駐屯地内に起居する成人者に対象が限定され、尚且つ開催場所が敷地内であることから、不要不急の外出を伴わないため、万全の対策を講じたうえで挙行された。

当日は、秋田県防衛協会中泉会長を始めとした、ごく一部のご来賓の方々と各部隊長が参列する中、成人を迎えた50名は、新成人としての自覚と責任を胸に式に臨んだ。

執行者（駐屯地司令 五十嵐 1 佐）は、コロナ禍における縮小開催への理解を求めた上で「成人になれば一人の大人として認められる一方、社会に対して責任ある行動が求められます。成人の日をここ秋田駐屯地で同僚とともに迎えたということを忘れず、自衛官としての誇りを胸に修養に励み、立派な社会人・自衛官として、真に自立し逞しく人生を歩んでいくことを期待します」と式辞を述べ、成人の門出を祝った。

第2中隊 堀江士長は「成人として自覚を深め自ら研鑽に励むとともに、国を守るという崇高な使命を持った自衛官として、成人を迎えたことを誇りに思い、国民・県民から信頼を得られるよう、日々努力していきます」と力強く新成人を代表して決意を表明した。

式典後、取材に訪れていた報道関係者からインタビューを受けた重迫撃砲中隊 渡部士長は「社会人2年目として、今まで以上に自覚のある行動を取るとともに、失敗を恐れず何事にも挑戦していきたいと思います。」と思いを語った。

成人の門出を迎えた隊員たちは、ひと際引き締まった表情で、未来への一步を踏み出した。



令和3年駐屯地成人式



来賓からの祝辞



成人者代表による決意表明 1



成人者代表による決意表明 2



敬礼する新成人たち



式典後の記念撮影



テレビ局からの取材風景



秋田県知事及び横手市・湯沢市・羽後町・東成瀬村の 4市町村長による表敬訪問



「ありがとう」を力に変えて

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐 1 佐）は、3月1日、秋田駐屯地において、秋田県知事及び横手市・湯沢市・羽後町・東成瀬村の4市町村長の、表敬訪問を受けた。

この度の訪問は、今年1月上旬、記録的大雪に見舞われた県内陸南部地域における第21普通科連隊の災害派遣活動に対して、各首長が表敬に訪れたもので、その中で各市町村より感謝状を頂いた。

県知事始め各首長からは自衛隊の活動に対し、「力強い支援だった」等の多くの感謝の言葉を頂いた。五十嵐連隊長は「秋田県に所在する部隊として普段お世話になっている地域の方々に少しでも貢献できたことを嬉しく思います」と連隊の思いを代表して述べた。

後日、駐屯地朝礼において四枚の感謝状とともに頂いた感謝の言葉が紹介された。隊員たちは、今後の励みにするとともに、これからも各種事態に即応し任務を完遂し得る部隊であり続けるよう尽力する思いを強くした。



秋田県知事及び横手市・湯沢市・羽後町・東成瀬村の 4市町村長による表敬訪問



秋田県知事



横手市長



湯沢市長



羽後町長



東成瀬村長



記念撮影





らっぱコンテスト



音色を紡ぐ

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐 1 佐）は、3月3日～4日の間、秋田駐屯地において、らっぱコンテストを実施した。

本コンテストは、連隊のらっぱ特技保有者の練度向上を図るとともに、部隊の士気高揚及び団結の強化を目的に開催された。6個中隊対抗のトーナメントにより課題曲の『君が代』及び日課号音から選ばれる抽選曲の計2曲を吹奏し勝敗を争った。3日に予選トーナメントを実施し、勝ち残った第2中隊と第4中隊が4日の連隊朝礼で行われる決勝戦にコマを進めた。各中隊を聞き比べると、遠くまで届く強い音、楽譜から外れることのない丁寧なメロディ等それぞれの中隊の強みがよく表れていた。

決勝戦は各隊員が見守る中、ステージ上で君が代と消灯らっぱが吹奏された。普段聞いている日課号音でも、改めて聞き比べると中隊毎で個性が違う音に聴衆は驚いていた。全力を尽くしたコンテストは僅差を制し、第4中隊が栄光を手にした。

審査委員を務めた五十嵐連隊長は「らっぱは古来から続く信号伝達手段であり、面々と紡いできた自衛隊の文化でもある。優勝した第4中隊は素晴らしいが、各中隊の実力は僅差であった。伝統ある重要な職務であり、駐屯地の顔でもあるらっぱ手に誇りを持ち、引き続きその職務を遂行するとともに練度向上に努めてもらいたい」と述べ、優勝中隊を讃えるとともに、参加した隊員たちを労った。



らっぱコンテスト



予選の様子 1



予選の様子 2



視線は指揮者に耳は仲間に



ワンフレーズに全力を尽くす



決勝戦
(優勝した第4中隊の吹奏)

表彰式





航空機体験搭乗



羽ばたく時間

陸上自衛隊秋田駐屯地（司令 五十嵐 1 佐）は3月27日、駐屯地において東北方面飛行隊の支援を受け、航空機体験搭乗を実施した。

本行事は平素から自衛隊を応援下さっている方々をお招きし、ヘリコプターによる飛行を楽しんでいただくとともに、自衛隊へのご理解をより深めていただくために実施された。

駐屯地グラウンドから飛び立ったヘリコプターは澄み渡る青空を約10分ほど飛行し、郷里の自然を空から満喫してもらった。また飛び立つヘリコプターを見上げたり、着陸するヘリコプターと一緒に記念撮影したりと、参加した方々はそれぞれ楽しい思い出を共有されていた。

2機19フライトに及んだ体験搭乗は、多くの方々に忘れられない春の思い出を残すとともに、秋田駐屯地との確かな絆を深めて終了した。



航空機体験搭乗



搭乗風景



飛び上がる瞬間



離陸後地上のスタッフたちに手を振る様子



飛び立つヘリコプターを撮影



並列しての丁寧な運転



ヘリとの記念撮影を企図するも降着する機体に目を奪われる子供